

秋思しゅうしの詩し（菅原道真すがわらのみちざね）

丞相じょうしょう 年としを 渡わたつて 幾いくたびか 楽思らくしす

今宵こんしょう 物ものに 触ふれて 自然しぜんに 悲かなし

声こゝろは 寒さむし 絡緯らくい 風かぜ 吹ふくの 処ところ

葉はは 落おつ 梧桐ごどう 雨あめ 打うつの 時とき

君きみは 春秋しゅんじゅうに 富とみ 臣しん 漸ようやく 老おゆ

恩おんは 涯岸がいがん 無なく 報むくゆること 猶なお 遅おそし

知らず 此この 意い 何いずくにか 安あん慰い せん

酒さけを 飲のみ 琴ことを 聴きき 又また 詩しを 詠えいず

丞相度年幾樂思 今宵觸物自然悲
聲寒絡緯風吹處 葉落梧桐雨打時
君富春秋臣漸老 恩無涯岸報猶遲
不知此意何安慰 飲酒聽琴又詠詩

解説 この秋に自分の胸中を詠った詩。

語釈 ※秋思Ⅱ秋に思う。 ※丞相Ⅱ中国の執政の大臣の異称。道真は右大臣となり、菅丞相と呼ばれた。 ※度年Ⅱ年月の経過を表わす。 ※今宵Ⅱ今夜。

※触物Ⅱ見るもの聞くもの全て。 ※自然Ⅱおのずから自然に。 ※声寒Ⅱ秋気の冷ややかさを感じさせる声。 ※絡緯Ⅱこうろぎ。 ※梧桐Ⅱあおぎり。 ※春秋Ⅱ年月、歴史などの意。将来に可能性を残した若くて元気なさまをいう。 ※漸Ⅱめっきりの意。 ※恩Ⅱ君恩。 ※涯岸Ⅱ物事の限度。果てしなく広大の意。 ※猶遅Ⅱ。その機会がなかなかやつてこない。 ※此意Ⅱ君恩に報いることが出来ず、焦燥の念にかられる心。 ※酒・琴・詩Ⅱ酒を飲み、琴を弾き、詩を詠ずる。

通釈 私は右大臣の職を拝し、年月を送り、楽しい思いもさせて戴きましたが、今宵は折りにふれ物にふれて、そぞろに哀れを催し、こうした御宴も、気が滅入るばかりで、心が晴れません。吹く風の中より聞こえてくるこうろぎの声は冷ややかに感じ、降る雨に桐の葉の舞い落ちるのを見るのは、たまらなく寂しいものであります。さて、陛下はお若いですが、私はめつきり年をとり、気の弱まりを感じます。陛下の御恩は涯しなく広く、君恩に報いることが出来ず、焦燥の念にかられ、この胸中は晴らそうとしても晴らす事が出来ない有様であります。白樂夫は憂悶を遣るでたととして、三つのものを挙げていますが、私もそれにならい、酒を飲み、琴を弾き、詩を詠じて自らを慰めんと思う次第です。